



1920 - 2020

竹内農場西洋館  
竣工100周年記念

竹内明太郎が残したもの

龍ヶ崎の赤レンガ西洋館



NPO 法人龍ヶ崎の価値ある建造物を保存する市民の会

## はじめに

茨城県龍ヶ崎市若柴町所在の竹内農場西洋館は、コマツ（株式会社小松製作所）や日産自動車株式会社の前身ダットサンの創業者である竹内明太郎が、自らの別荘とした大正9（1920）年竣工の赤レンガの建物です。

空き家となってから約70年間藪に包まれていたため、龍ヶ崎市民の間でもあまり知られていません。現在は廃屋となっていますが、当時最上級である上敷免製（渋沢栄一等が設立した日本煉瓦製造株式会社製）のレンガが使用されていて、文化財として、あるいは史跡として価値が高い建物と考えます。令和2（2020）年1月、龍ヶ崎市は「旧竹内農場赤レンガ西洋館及び竹内家文書」を市民遺産に認定しました。しかし、現時点では西洋館をどのように残せるのか具体的な方針がまだ決まっていません。

私たち「NPO 法人龍ヶ崎の価値ある建造物を保存する市民の会」は西洋館が竣工100周年を迎える今年、記念冊子を発行することとなりました。この冊子をお読みいただいた方々に西洋館の歴史と建物の素晴らしさを知っていただき、保存の意義と重要性をご理解いただくことは、保存事業の大きな後押しとなることでしょう。西洋館が市民の誇りとして後世に受け継がれることを願っています。

令和2（2020）年3月

NPO 法人龍ヶ崎の価値ある建造物を保存する市民の会

理事長 前田享史

※本文中「NPO 法人龍ヶ崎の価値ある建造物を保存する市民の会」を「当 NPO 法人」と略称で記す。

# 目次

●	ごあいさつ 龍ヶ崎市長 中山一生氏	2
●	刊行にあたって セレンディップ・コンサルティング株式会社 代表取締役社長 竹内在氏	3
1	龍ヶ崎市の竹内農場と西洋館の概要	4
2	女化原開拓の歴史	6
3	西洋館の現状	8
4	竹内農場の歴史	10
5	竹内綱と明太郎	12
6	茨城無煙炭鉱	15
7	竹内鉱業	18
8	竹内農場西洋館の建築様式	22
9	実測図と復元平面図	24
10	竹内農場西洋館のレンガ 深谷市教育委員会 幾島 審氏	26
11	西洋館の庭園設計	28
12	最後の居住者真中ハツさんの思い出	30
13	保存に向けて	32
●	竹内農場西洋館へのアクセス	33
●	竹内農場関連年表	34
●	参考文献・謝辞	36
●	編集後記	37

## ごあいさつ

### 龍ヶ崎市長 中山一生



このたびは旧竹内農場赤レンガ西洋館に関する冊子を刊行されましたこと、誠にありがとうございます。

当市の蛇沼のほとりの西洋館、私にとっては、中学生時代に生物部の昆虫採集で蛇沼を訪れた際、自転車から見た赤レンガのその姿は深く記憶に刻まれていました。長い年月の間、人々の記憶から忘れ去られたような存在でしたが、市長になってからは、この歴史遺構を後世に残せないかと考えていました。そこに、突如同所への太陽光発電設備設置計画が明らかになり、存続の危機となりました。急遽、市として調査研究を行うべく、土地所有者と交渉し、ご理解をいただき、当該土地を賃借するに至りました。

また、旧竹内農場が北茨城市に所在した茨城無煙炭鉱株式会社の附属施設として設置されたものであることなどから、当市では象徴的な赤レンガ西洋館を日本の近代化の中で生まれた遺産の一つと捉え、これを保存することになりました。調査研究の過程で借り受けた資料についても、竹内家のご厚意で当市に寄贈頂いたことから併せて市民の財産として保存継承していきたいと考えております。

若柴町字長山前に所在した竹内農場については、昭和60年に「女化」開拓事業の一部として調査され、若干の資料とともに刊行物で紹介された以降、本格的に調査研究が行われたことがありませんでした。市内には残存する資料もなく、調査は困難と思われましたが、かつての所有者である竹内明太郎氏のご子孫が資料を保管されていることを知り、写真や絵図面、手紙等を借り受け、文化・生涯学習課において1年余りの年月をかけ、手紙の解読作業や現地に残るレンガ造りの別荘跡の調査や図面作成等を実施し、平成30年1月に調

査報告書を刊行したことはご承知の通りです。

当初は、明太郎氏の父である竹内綱氏が建てたとされた赤レンガ西洋館が、実は明太郎氏の別荘として建てられたこと、材料として使われたレンガについては、渋沢栄一が設立に携わった工場で生産された東京駅丸の内駅舎にも使用されている上敷免製の国産レンガであること、明太郎氏が足繁く当地に足を運び、農場や別荘の建設状況を確認していたことが、高知県宿毛市にある宿毛歴史館に所蔵されている『竹内明太郎日記』に記されているなど、初めて明らかになったことは枚挙にいとまがありません。

今後、当市では赤レンガ西洋館が遺る敷地にフェンスや説明板を設置するとともに駐車スペースを整備しますので、令和2年春には市民の皆様が安心してお披露目できるように準備を進めています。

前田代表をはじめとしたNPOの皆様が今回取り組む事業は、竹内綱・明太郎親子の出身地である高知県宿毛市を訪問するなど大規模なものと伺っております。新たな発見があることを期待するとともに、本件に限らず私たち龍ヶ崎市民共通の歴史的資源の保存・継承へのご理解とご協力をお願い申し上げ、お祝いの言葉といたします。

(なかやま・かずお)

# 刊行にあたって

## セレンディップ・コンサルティング株式会社

代表取締役社長 竹内 在



「龍ヶ崎という街に、明太郎が残した農場跡地があり、そこには古い西洋館がある。」私が幼いころから父に聞かされてきた言葉だ。

子供のころの私にとって、竹内明太郎は教科書に出ている歴史上の人物と変わりが無い。明太郎は政治家であり、実業家であった。多くの炭鉱を保有し、建機メーカーであるコマツを創業し、唐津鉄工所の創立者でもあり、日産自動車の前身の快進社等を設立し、さらに早稲田大学理工学部、高知工業高等学校などを創設し、日本の工業立国に尽力した。竹内家の口伝で語り継がれる明太郎の人物像やそのあまりにも華やかな経歴は、どこか夢物語のようであり、私にとって現実離れた存在だった。

その考えが大きく変わったのは、私自身が十年前に会社を興し、経営者となり、ものづくりに従事するようになってからである。大きな壁や困難な状況に陥るたびに、竹内明太郎に想いをよせるようになった。彼は、何を見て、何を想い、何を残そうとしたのか？現実離れた歴史上の人物から、曾祖父に戻った瞬間でもあった。

そんな折、平成27(2015)年のある日、高齢となった叔父からある相談を受けた。「龍ヶ崎にある土地を処分できないだろうか？」この土地の利活用について、一族でも過去何回か検討されたことがあるが、どれも不調に終わった。その一番の理由は、この土地が「市街化調整区域」だったということもあり、土地の所有者であっても建築には規制がかかっていたためだ。素晴らしい西洋館なので再建・移築の検討もしたが、試算の結果、数億円かかることが判明し、断念せざるを得なかった。また、龍ヶ崎市に対して無償譲

渡を打診したことがあるが、この時点では前向きな回答をもらうことはできなかった。

先祖から受け継いできた土地を売却するというのは、断腸の思いに違いないが、東日本大震災以降、西洋館の外壁は崩落の危険性があり、また相続による地権者の分散化によるリスクも想定されていたため、残された時間はあまりなかった。再建もできず、寄付もできないという状況の中、困っていたところにある法人が購入を希望しているとの話を聞き、手放すことを決意した。

西洋館の売却を私が担うことになり、最後の幕引きをすることになった。初めて訪れた冬の龍ヶ崎は冷たく澄んだ空気におおわれ、林の中に無言で佇む西洋館は、朽ちかけた廃墟でありながら、気品を保ったままでいた。手放すことへの複雑な心境ではあったが、私の手で終わらせることが西洋館に対するはなむけであると信じ、手続きを終わらせた。

それからしばらくして、西洋館が取り壊される前に息子に一目見せようと思い、龍ヶ崎市が主催した龍ヶ崎市歴史民俗資料館企画展「竹内農場と赤レンガ西洋館」(平成30(2018)年8月1日～9月2日)を訪れた。その際、明太郎の導きとしか思えない偶然の出会いから、前田享史氏とお会いする機会をいただいた。そこで「龍ヶ崎の価値ある建造物を保存する市民の会」が保存活動を開始し、再びこの土地や建築物に脚光を浴びせていただいていることを知った。街ぐるみで保存を推進していただいている皆様のご尽力と「旧竹内農場赤レンガ西洋館及び竹内家文書」を市民遺産に認定していただいた龍ヶ崎市に対し、ここに竹内家を代表して謝意を表します。

(たけうち・あり 竹内明太郎曾孫)